

みんな違って

「週末寸言」原稿 20080913

英ちゃんはその名の通りクラスで一二を争う秀才だった。どうしても理解できない問題が出てくると英ちゃんと二人で一緒に考えた。ああでもない、こうでもないと言いつつ見つかると、自然に答えが見つかる。これはとても不思議だったし、何よりもそう快かった。

賢ちゃんはその名に相違して、成績はクラスのビリに位置していた。学力に自信の無い賢ちゃんはいつも誰彼の頭脳を利用して宿題をやっつけていた。ところが、賢ちゃんに答えを理解させるのは容易なことではない。ああ説明しても、こう解説しても賢ちゃんには理解してくれない。それどころか最後には怒り出す。賢ちゃんは体育会系で、運動会のヒーローだったから、怒らせるのが怖かった。テストよりも賢ちゃんに分からない方がはるかに難しかったが、賢ちゃんが分かっていたといってくれた時には、教えた者の理解度は数倍になつていた。なにしろ、賢ちゃんに理解してもらおうためにあ

らゆる方角から説明できるよ
うに実力をつけてしまったか
ら。だから賢ちゃんはクラス
の学力向上に必須の人だった。
民子さんは、本当は2歳年
長だったが、闘病のために空
白ができて僕たちの五年一組
に入ってきた。彼女は、重度
の脳性マヒだったから自分で
は登校はもちろん、手洗いも、
食事もできなかった。

春四月、民子さんがクラス
に入ってきた時にもっとも張
り切ったのは賢ちゃんを筆頭
に運動会のヒーローたちだっ
た。民子さんの家は学校とは
目と鼻の先だったから、朝の
1時間目と2時間目との間の
短い休み時間に、彼らは竹で
編んだ椅子に座った民子さん
を教室まで運んできた。こう
いう仕事が雨の日も風の日も、
翌年2月、ふとした風邪がも
とで民子さんがみまかるまで
毎日続けられた。

以上は、今は昔、筆者の少
年時代の学校風景。「みんなち
がって、みんないい」。薄汚い
校舎に、世界中から無作為抽
出で集められたような玉石混
交の子供たち。敗戦直後のこ
ととて教材どころか着るもの
も食べる物すら無かったが、
子供たちをまっとうに育てる
豊穡な時間だけがゆったりと
流れていた。